

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02859

研究課題名(和文) 若手教師の経験学習能力の分析と経験学習促進研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing training program based on young teachers' experiential learning ability

研究代表者

益子 典文(Mashiko, Norifumi)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：10219321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：ベテラン教師・若手教師のインタビュー調査および初任教師の質問紙調査から、特に経験から教訓を引き出す過程の支援が有効であること、経験内容の「定型化要素」を導入し、情報の収集と整理を促進する支援が有効であること、学校を基盤とした経験学習促進のためには、同僚との関わりに「定型化要素」を導入し、その後、それを基盤としたストレッチの機会を提供することが有効であること、が示された。また、若手教師が中堅教師と交流し授業再設計を行う研修プログラムを開発・試行した。その結果、若手教師の「学習者についての知識」が豊かに活用されるようになり、教授行動や考え方を変化させることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教師のキャリアにとって、教職初任者から5年経験者までの若手教師期間の経験学習能力の形成は、その後の専門性の発達を促進するものと考えられるため、教師発達において、とりわけ重要な時期と言える。しかし、この時期にどのような学習を展開すれば成長が促進されるかに関する研究は見られない。また若手教師の成長支援は、講話や勤務校でのOJT(On the Job Training)に依存するプログラムが多く、効果も定かではない。本研究の成果は、若手教師の専門性発達の基盤となる経験学習能力育成にあたり、勤務校内外の支援方法の一定の指針を示すものであり、社会的意義のある成果である。

研究成果の概要(英文)：From the interview survey of veteran teachers and young teachers, and the questionnaire survey of novice teachers, (1) it is effective to support the process of drawing lessons from their experiences, (2) the "standardization element" of the experience is introduced to collect information, to promote organization is effective, and (3) In order to promote school-based experiential learning, introduce "formalization elements" in relation to colleagues, and then provide opportunities for "stretching" experience based on them.

We also developed and tried a training program in which young teachers interact with mid-career teachers and redesign their lessons. As a result, it was shown that the "knowledge about learners" of young teachers was enriched and changed the teaching behavior and way of thinking.

研究分野：教育工学

キーワード：教師教育 若手教師 経験学習

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

経験学習のモデルとして、Kolb(1984)の経験学習モデル、松尾(2011)の「経験から学ぶ力」モデルなどが提案されており、省察を通して経験から教訓を引き出すとともに、その教訓を実践で検証すること(Kolb)や、取り組んでいる行為に仕事のやりがいや意味を見いだすことが重要であることが示されている。さらに、これらの経験学習モデルに基づく教師の成長に関する実証的研究(益子・前田 2017)や、「開いた教師 - 閉じた教師」というメタファーを用いた教師固有の経験学習モデルも提案されている(姫野・益子 2015)。一方、教職初任者から5年経験者までの若手教師の成長は、中堅やベテランとは異なる特徴が見られる。とりわけ、初任教師の1学期は「自信喪失の試練の時期」であり「サバイバル期」(吉崎・新井 1997)と呼ばれており、学習能力を最大限発揮することが求められる時期である。教師のキャリアにとって、教職初任者から5年経験者までの若手教師期間の経験学習能力の形成は、その後の専門性の発達を促進するものと考えられるため、教師発達において、とりわけ重要な時期と言える。しかし、この時期にどのような学習を展開すれば成長が促進されるかに関する研究は見られない。

### 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究の核心となる学術的問いは、生涯を通じて成長を促す基盤となる、初任から5年間程度の、教師の経験学習能力の形成過程を明確化することである。すなわち、

#### 【研究目的1】若手教師の経験学習能力形成モデルの構築

教師の経験学習能力は、教職に関するコンピテンシー(業務の高遂行者の持つ特性)の一つとして位置づけられる。若手教師に特化した経験学習能力形成モデルを構築する。

#### 【研究目的2】ケースメソッドによる若手教師対象の経験学習促進プログラムの開発

研究目的1の過程で収集した事例および、若手教師の経験学習能力形成モデルに基づく経験学習を促進するプログラムを提案する。

### 3. 研究の方法

#### (1)若手教師の経験学習能力形成モデルの構築【研究目的1】

ベテラン教師を対象とした若手時代の問題解決経験のインタビュー調査

ベテラン教師(中学校17年間、教育行政職で10年間の経験)を対象にし、初任から5年目程度の期間に、これまでの教職経験に有用であった問題解決事例のインタビュー調査を行う。まず教師の若手時代の経験事例について紙面調査を行う。次に、紙面調査の回答内容から、記述された問題解決事例一つ一つについてインタビュー形式で詳細を尋ねる。

教職初任時の授業設計力向上に関する事例研究

教職2年目の若手教師に、初任1年目の授業記録をもとに、授業力向上という課題に対し、どのように取り組んだのか、インタビュー調査を行う。調査対象者は、X県の教職2年目の中学校国語科教師である。講師経験はなく、大学卒業と同時に初任教師として勤務を開始した。調査対象者は教職1年目の授業設計の記録をすべてノートに残している。またタブレット端末に授業後の板書記録、生徒用学習プリントの記載・評価記録を大量に残している。それらの記録をすべて持参してもらった上で、教職1年目の4月から3月までの授業設計活動や活動の様子を尋ねるインタビュー調査を行った。

#### (2)若手教師対象の経験学習促進プログラムの基礎的研究と設計【研究目的2】

初任者教師の学校内での経験学習状況の調査

学校における経験学習促進プログラム開発のため、初任者が赴任した学校において、どのような時期にどのような経験を重ねているのかを知る必要がある。そこで、教育委員会事務局の協力を得て、平成 31 年 2 月に初任者研修受講者を対象とした経験学習に関する調査を実施した。対象は、小学校初任者（講師経験なし 71 名、講師経験あり 91 名）、中学校初任者（講師経験なし 71 名、講師経験あり 55 名）である。調査項目として、松尾（2011）のモデルに沿った、ストレッチ・リフレクション・エンジョイメントの年度末の状態の回答を求めるとともに、年間を通じた「開く - 閉じる」状態の変化および変化した理由を自由記述で回答をを求める項目を配置した。

#### 校内研修プログラムの設計と実践

初任者・若手教師に対する調査結果を踏まえ、小学校初任者を対象とした校内研修プログラムを設計・実践し、その効果を検証した。調査対象者は、X 県の公立 Y 小学校 2 年生担任の教師 2 人である。若手教師は教職 2 年目で学級担任が初めての A 教師である。採用初年度は特別支援学級を担任しており、2 年生と関わる機会はほとんどなかった。中堅教師は教職 11 年目の B 教師である。Y 校勤務 5 年目で、2 年生担任は 4 回目である。

### 4. 研究成果

#### (1) 若手教師の経験学習能力形成モデル

ベテラン教師の若手時代の問題解決経験に関するインタビュー調査では、10 事例を収集した。これらすべて「その後の教職経験に役立った」との回答であったこと

表 1 経験学習サイクルに関する発話数

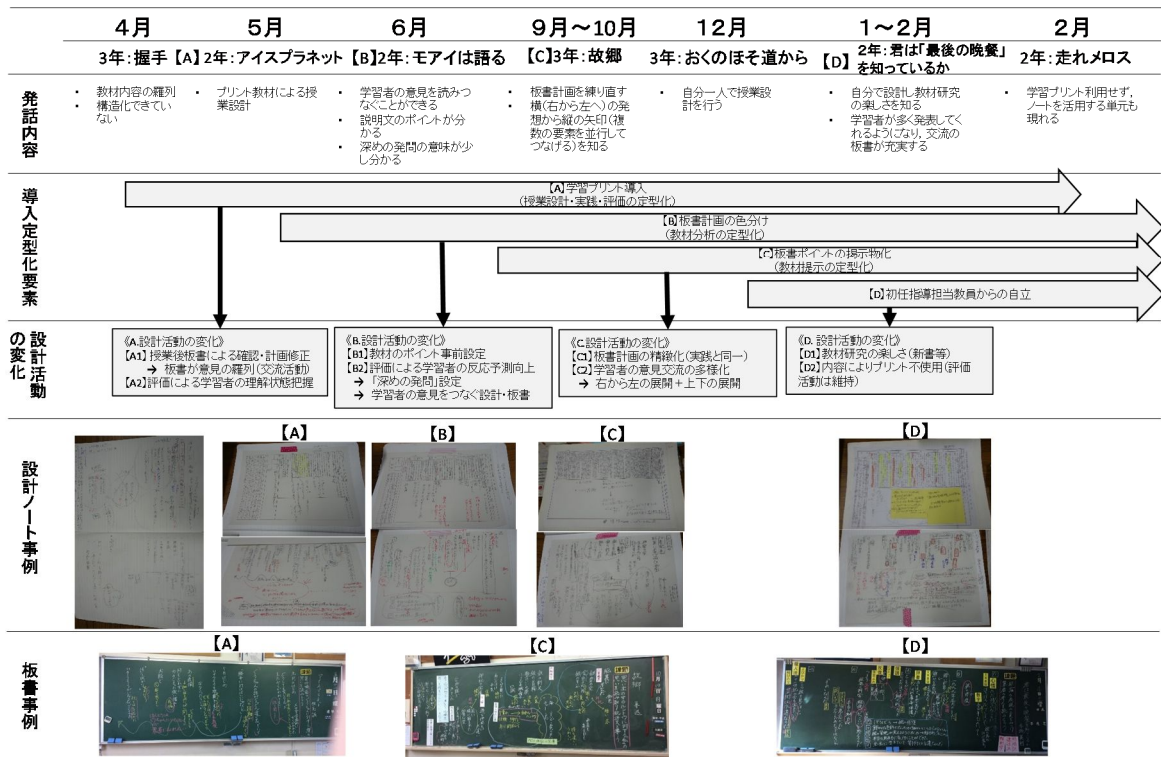
		具体的 経験	内省的 観察	抽象的 概念化	能動的 実験
1サイクル	頻度	10	8	2	8
	残差	1.101	0.540	-2.684**	0.877
2サイクル	頻度	6	6	10	5
	残差	-1.101	-0.540	2.684**	-0.877

から、この 10 事例を分析対象とし、発話内容を Kolb の経験学習のプロセス（「具体的経験」「内省的観察」「抽象的概念化」「能動的実験」）にそれぞれ分類する作業を行った。すると、すべての事例で、最初に問題解決に失敗し改善する 1 回目のサイクルが発生し、その後時間が経過した後はその経験の抽象的概念化を行い、教訓を引き出す 2 サイクル目が存在することが示された。1 サイクル目、2 サイクル目以降の発話頻度をカウントした結果を表 1 に示す。カイ二乗検定を行ったところ、 $\chi^2(3)=7.296$  であり、10%水準で有意傾向が見られた。残差分析を行った結果、1 サイクル目の抽象的概念化の頻度が低く、2 サイクル目以降の抽象的概念化の頻度が高いことが示された。このことから、若手教師の経験学習は、Kolb モデルの「具体的経験」「内省的観察」までは、経験したその時点で進行するものの、その経験から教訓を導き出す「抽象的概念化」に至るのは、一定の時間が経過した後となる傾向があると言える。すなわち、若手教師の経験学習能力育成にあたっては、「抽象的概念化」のプロセスの支援が重要であると言える。

次に、教職初任時の授業設計力向上に関する事例研究におけるインタビューの結果をまとめた図を示す（図 1）。4 月の時期のノートは、右から左に板書計画を羅列している状態であり、指導教員の加筆修正した痕跡が見られる。これ以降、ノートの設計活動記録に見る方法の変化は、1 年間で 4 回見られた。まず学習プリントを導入し、授業の進行を定型化するものである（A 期）。学習プリントには、教材文とともに「ひとりよみ」（個人活動）、「仲間よみ」（グループ活動）欄を設け、それぞれ 1 単位時間で授業を進行する。ノートの記載も、上側に学習プリント、下側に板書計画を記録する形態へ変化している。また、A 期の段階では、学習プリントの個人活動終了時に全員に提出を求め、評価規準による評価を行うことにより、学習者の理解状態把握が進行している。

次に、設計段階の板書計画に「表現の工夫（赤）」、「読み取り方（緑）」のように、重要なポイ

図1 教職初任者の授業設計活動の変化（中学校国語科）



ントを色分けして記入する定型化が導入される時期である（B期）。同時に、「仲間よみ」後に、クラス全体で読みを深めるための「深めの発問」を版諸計画に設定できるようになっている。C期には、B期に導入した「表現の工夫」「読み取り方」のポイントが実際の板書でカード化・定型化されると同時に、右から左への板書計画に上下の展開（矢印）が加わり、計画と実際の板書のズレがほぼ解消されている。そして12月以降は、自分が主体的に教材研究や授業設計を行う形態へと変化し、教材内容によっては学習プリントを利用しない単元も現れ始めている（D期）。

この事例分析からは、就職前に身につけていた基盤となるノート利用の学習方法（システム）に対し、(1)それぞれの時期毎の課題を整理するために定型化要素が投入され、(2)その定型化要素によるズレの認識や学習が進行する、という経験学習活動が観察されている。課題整理を実現するとともに、ストレッチとリフレクションの展開を可能とする定型化要素の投入が、時期毎に複数回行われていることは、教職初任者の成長を支える経験学習の特徴の1つと考えられるだろう。授業実践直後に「内省的観察」を行うことは比較的容易であるが、そこから教訓を導出し授業実践の改善を行う活動へ展開するためには、学習者の理解状況を把握・蓄積し、自らの授業設計結果を見直す必要がある。学習プリントや板書のカード化は、授業の進行を定型化するものであるが、一方で授業設計の際に考える作業を低減し、改善のポイントを絞る機能も併せ持っている。したがって、この事例において経験学習サイクルで投入されている定型化要素は、先のベテラン教師の若手時代の問題解決経験に関するインタビューで見られた「抽象的概念化」を促す働きを持つ要素と言える。

(2)若手教師対象の経験学習促進プログラムの基礎的研究と設計

初任者教師の大学新卒教師と講師経験教師を比較すると、講師経験教師は先行して経験学習能力を発達させていると考えられる。そこで、小学校・中学校の初任教師の大学新卒群と講師経験群別に、1年間の経験学習の変化を分析することとした。小学校・中学校別に、2群の「開く-閉じる」状態およびその変化理由の自由記述の分析を行ったところ、小学校教師は、いずれの群も、年度冒頭に「閉じる」状態（経験から学ぶことが困難な状態）への変化が見られ特に大学

新卒群はその傾向が顕著であること。その後2学期までに「開く」状態(経験から学ぶことが可能な状態)へと変化し、年度末には大学新卒群と講師経験群の差が見られなくなる一定の傾向が確認された。変化理由の自由記述内容の分析からは、初期に吉崎らの言う「自信喪失の試練の時期」を迎えた初任者は、同僚との関わりにより「開く」状態へと変化し、2学期の運動会などのイベントや公開授業を行うストレッチの機会を得ることでその関わりを深め、年間を通して「開く」状態となることが示された。一方、中学校教師は、特に初期から1学期にかけて小学校教師のような「閉じる」顕著な傾向は見られない。教科担任制である点が影響を与えていると思われるが、さらに分析が必要である。

次に、設計した研修プログラムはA教師・B教師2名の勤務への影響を最小とするためA教諭の授業実践前後に15分程度の検討会(対話)を行うものである。まずA教師が学習指導案を作成(算数科)し、B教師との事前検討会を行う。この対話を踏まえA教師は、学習指導案の再設計を行う。改訂学習指導案をもとに授業実践を行い、実践後に授業を参観したB教師との事後検討会を行う。この対話後、A教師は学習指導案の再々設計を行う。研修プログラムを実施した年度末に、2名の教諭にインタビューを行い、本研修プログラムの評価を行った。まず、検討会における2名の教師の発言データを分析したところ、研修プログラムによる授業再設計活動は、若手教師の「学習者についての知識」を豊かにし、教授行動や考え方を変化させていることが示された。また、年度末に実施した研修プログラムの持続効果に関するインタビュー調査では、研修プログラム実施後の初任者の授業設計活動が継続的に「学習者についての知識」に基づくものへと変化したことが示されており、A教師の経験学習の質を変化させたと言える。

### (3) 総合考察

本研究の成果として、若手教師の経験学習能力促進のためには、経験学習サイクルの中でも「抽象的概念化」による教訓を引き出す過程の支援が有効であろうこと、そのためには、学習プリントのように経験内容の「定型化要素」を導入し、改善のための情報の収集と整理が可能な支援が有効と考えられること、さらに初任者に対しては、学校を基盤とした経験学習促進プログラムの設計方針として、同僚との関わりについて「定型化要素」を導入し、その後、それを基盤としたストレッチの機会を提供することが有効であることが示された。また、これらの成果をもとに設計した研修プログラムでは、経験学習の質を変化させる一定の効果が認められた。今後、研修プログラムの条件をさらに明確にするよう、引き続き研究を遂行する予定である。

### <引用文献>

姫野完治, 益子典文, 教師の経験学習を構成する要因のモデル化, 日本教育工学会論文誌, Vol.39(3), 2015, 139-152

Kolb, D.A., Experimental Learning: Experience as the Source of Learning and Development, Prentice Hall, Englewood Cliffs, NJ, 1984

益子典文, 前田康裕 現職教師の教育実践研究の持続条件に関する一考察, 日本教育工学会論文誌, 41(Suppl.), 2017, 141-144

松尾睦, 経験学習入門, ダイヤモンド社, 東京, 2011

吉崎静夫, 新井孝喜, 初任教師の授業力量形成に関する研究, 日本女子大学紀要(人間社会学部), Vol.8, 1997.227-238

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 日比光治・益子典文・國府田珠実	4. 巻 37(1)
2. 論文標題 新規採用教師の初年度末の成長状況に関する一考察 - 「経験から学ぶ力」の自己評価に基づく分析 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 89-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂井和裕・益子典文・國府田珠実	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 教育センターにおける現職教員研修評価に関する基礎的研究 岐阜県総合教育センターにおける教員研修評価の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 117-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 近藤健次・長澤紀明・坪内清次郎・堀内教子・鈴木健・坂井和裕・益子典文	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 教育センターにおける教員研修の評価分析に関する事例研究 岐阜県総合教育センターにおける教員研修評価の実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 162-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋 咲衣子・益子 典文	4. 巻 35(1)
2. 論文標題 若手教師の成長につながる経験学習の方法の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 84-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 益子典文・細川里奈	4. 巻 38(1)
2. 論文標題 授業設計力の形成過程における初任教師の経験学習の特徴 - 中学校初任教師の事例研究 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岐阜大学カリキュラム開発研究	6. 最初と最後の頁 199-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 日比光治・益子典文
2. 発表標題 小学校初任教師の経験学習を促す校内環境に関する事例研究 - 環境設計者としての管理職へのインタビュー調査を通して -
3. 学会等名 日本教育情報学会第36回年会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 日比光治・益子典文
2. 発表標題 小学校初任教師の経験学習を可能にする条件
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 益子典文
2. 発表標題 授業設計力向上に関する初任教師の経験学習活動の事例研究
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中嶋郁雄・益子典文
2. 発表標題 授業再設計による若手教師の授業設計活動改善支援
3. 学会等名 日本教育工学会2021年秋期全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------